

学位論文要約

重度障害者きょうだいの心理的葛藤に関する研究
——家族サブシステムに着目して——

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 心理学分野

D176683 高野恵代

目 次

第 1 章 本研究の背景と目的

- 第 1 節 障害者家族に関する問題
- 第 2 節 障害者のきょうだいに関する研究の動向
- 第 3 節 障害者の母親ときょうだい間の葛藤に関する研究の動向
- 第 4 節 本研究の目的

第 2 章 母子関係と同胞関係の関係性からみたきょうだいの心理的葛藤

： 半構造化面接による意識的側面の検討 (研究 1)

- 第 1 節 母子関係と同胞関係のサブシステムの類型化 (研究 1-1)
- 第 2 節 きょうだいの心理的葛藤の様態 (研究 1-2)
- 第 3 節 母子関係と同胞関係のサブシステムからみたきょうだいの心理的葛藤の様態 (研究 1-3)

第 3 章 母子関係と同胞関係の関係性からみたきょうだいの心理的葛藤

： TAT による無意識的側面の検討 (研究 2)

- 第 1 節 健常大学生と比較したきょうだいの無意識的な心理的葛藤の特徴 (研究 2-1)
- 第 2 節 無意識的母子関係と無意識的同胞関係のサブシステムの類型化 (研究 2-2)
- 第 3 節 きょうだいの無意識的な心理的葛藤の様態 (研究 2-3)
- 第 4 節 無意識的母子関係と同胞関係のサブシステムからみたきょうだいの無意識的な心理的葛藤の様態 (研究 2-4)

第 4 章 母親からみたきょうだいと同胞との関係性およびきょうだいと

の認識のズレに関する研究 (研究 3)

- 第 1 節 母親からみた母親ときょうだい、母親と同胞との関係のサブシステムの類型化 (研究 3-1)
- 第 2 節 きょうだいの心理的葛藤に対する母親の認識に関する検討 (研究 3-2)

第 5 章 総合考察

- 第 1 節 本研究の成果
- 第 2 節 本研究の限界と今後の課題

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 障害者家族に関する問題

障害者家族は家庭で発生する諸問題だけでなく、地域社会との関わりの中でも様々な問題に直面し、心理・社会的ストレスを負っている (e.g., Ali, Hassiotis, Strydom, & King, 2012)。治療技術の進歩と医療体制の整備により、重度障害があっても長寿命化は可能となったが、老障介護問題が現実化した今、重度障害者家族に対する支援は重要な課題である。

障害者が家族に与える影響や家族のストレスについては多くの研究が行われてきたが、実際に問題が発生する家族とそうでない家族がある。障害者家族と健常児をもつ家族のストレスを比較した Kazak & Marvin (1984) は、障害者家族の方がストレス度は高いが、家族の凝集性が高いとストレス対処をうまく行っていることを示した。また、障害者の療育や日常生活のケアで家族の結合が深まることもあり (中村, 2011)、障害者から受ける影響は必ずしも否定的なものばかりではなく、肯定的側面も含めて捉える必要がある (Simeonson & McHale, 1981)。さらに、家族のライフサイクルに応じて障害者家族の問題をみる必要性があることから (河野, 2005)、家族成員の発達段階にも着目する必要がある。

第 2 節 障害者のきょうだいに関する研究の動向

高齢化した親の代わりに、もしくは親亡き後の障害者の世話を担う存在として、兄弟姉妹に注目が集まるようになった (e.g., Hodapp, Glidden, & Kaiser, 2005)。以下、本研究では、障害者の健常な兄弟姉妹をきょうだい、障害のある当事者を同胞と表記する。きょうだいは一般的な兄弟姉妹より不適応的な問題を抱えやすく (e.g., McHale & Gamble, 1989)、家族間葛藤がきょうだいの適応問題に影響を与え (e.g., Davis & Cummings, 1994)、家族システムの満足度がきょうだい関係の思いやりと葛藤に関連

するという指摘もある (Bellin & Rice, 2009)。しかし、障害者家族には、障害の種類や程度などの同胞の要因、きょうだい数や出生順、年齢差などのきょうだいの要因、家族の大きさや社会経済的地位などの家族要因が様々存在する。これらの要因がきょうだいの適応問題に影響するとされるが、結果は一定ではない (平川, 1986)。そこで、本研究では、きょうだいの適応問題を検討するため、①親が高齢化し始める青年期きょうだいを対象とし、②同胞の障害の程度を重度障害とする。③家族の様々なシステムパターンによってきょうだいの問題が異なると考えられることから、家族システムの視点から捉える。とくに、同胞への関わりが深い母親を含めた、母親と同胞ときょうだいのサブシステムを検討し、家族間の関係性の違いに基づききょうだいの適応問題を明らかにする。

中村 (2007) は、質問紙と動的家族描画法を用いて学校環境がきょうだいに与える影響について検討した。結果、質問紙ではきょうだいの社会適応は良好と示されたが、描画では葛藤や不安が示された。これは、きょうだいの意識とは逆の心理を有している、つまり、自己一致を妨げる状態がきょうだいに生じていることが考えられる。これは、きょうだい支援において臨床的に重要な視点だが、無意識的側面を実証的に検討した研究が行われていない。そこで、本研究では、きょうだいの無意識的な葛藤を投映法によって明らかにする。

第3節 障害者の母親ときょうだい間の葛藤に関する研究の動向

障害者の母親研究は、障害受容に関する研究を中心に多くなされてきたが、母親ときょうだいに関する研究は少ない。在宅重症心身障害児者の母親の困り事などを調査した小宮山ら (2008) は、母親なりにきょうだいを理解して対応しようとしているが限界があり、罪悪感やネガティブな感情が大きいことを示した。松岡・井上 (2002) は、きょうだいが

発達障害者の同胞との問題や葛藤を乗り越えていく過程で生じる母親との意識のズレを検討した結果、同胞の障害理解の意識と、お互いが思いやる気持ちがズレていることを示した。一方で、お互いを思いやる気持ちのズレの程度は大きくないとする知見もある(橘・島田, 1990)。これらから、母親ときょうだい間には同胞の障害理解や思いやりにズレが生じていることが推察されるが、研究数が少ないうえに一貫した結果はみられず、重度障害者家族にも存在するかどうかは不明である。そこで本研究では、重度障害者きょうだいが同胞との関わりの中で体験する葛藤と、母親からみた時の葛藤との違いを「ズレ」とし、検討する。

第4節 本研究の目的

本研究では、重度障害者きょうだいの心理的葛藤について、家族システムと発達変容の視点から、以下の点を実証的に検討することを目的とする：①物理的、心理的に同胞と関わる機会の多い母親を含めた、きょうだい－母親－同胞サブシステムの意識的側面と無意識的側面の検討(研究 1-1, 2-2), ②きょうだいの心理的葛藤の意識的側面(研究 1-2)と無意識的側面(研究 2-1, 2-3)の検討, ③②によるサブシステムのタイプによるきょうだいの心理的葛藤の違いを検討(研究 1-3, 2-4), ④母親が捉えるサブシステムの特徴と、きょうだいの心理的葛藤と母親が捉えるきょうだいの葛藤のズレについての検討(研究 3-1, 3-2)。

第2章 母子関係と同胞関係の関係性からみたきょうだいの心理的葛藤

: 半構造化面接による意識的側面の検討(研究 1)

第1節 母子関係と同胞関係のサブシステムの類型化(研究 1-1)

1. 目的 きょうだいと母親の母子サブシステム(母子関係)と、同胞サブシステム(同胞関係)を類型化し、その特徴を検討する。

2. 方法 (1) **対象者** Z 県の障害者団体の家族会に所属するきょうだい 18 名 (男性 3 名, 女性 15 名, 平均年齢 22.8 歳)。同胞の障害は脳性麻痺 ($n=10$), 筋ジストロフィー, ダウン症等であった。(2) **手続き** 個別の半構造化面接を実施した。(3) **調査内容** 幼児期から現在に至る母親と同胞との関わりについて。(4) **分析方法** 母親および同胞との関わりに関する語りを抽出し, 切片化した語りを発達段階に沿って並べてラベリングした (一致率は母子関係 88.9%, 同胞関係 89.0%)。次に, 対象者ごとに関係性の変容のラベリングを行い, 全対象者の関係性の変容からサブシステムを類型化した (一致率は, 母子関係 100.0%, 同胞関係 94.4%)。

3. 結果と考察 母子関係は, 「積極的関与型」, 「良好型」, 「好転型」, 「非関与一退却型」, 「巻き込まれ一親役割補完型」に分類された。同胞関係は, 「良好型」, 「好転型」, 「非関与一退却型」に分類された。両関係を合わせた結果, 7 類型に分類された (Table 1)。

Table 1

きょうだいからみた母子関係と同胞関係を合わせたサブシステムの類型化

	母子関係			
	積極的関与型 良好型 (Po)	好転型 (Ne→Po)	非関与型 巻き込まれ型 (Ne)	
同 胞 関 係	良好型 (Po)	$n=4$ (E,F,J,Q)	$n=1$ (I)	$n=1$ (K)
	好転型 (Ne→Po)	$n=5$ (B,C,L,N,R)	$n=4$ (A,G,O,P)	—
	非関与型 (Ne)	—	$n=2$ (H,M)	$n=1$ (D)

注1. アルファベットは対象者を示す。

注2. Po: 肯定的関係, Ne: 否定的関係, Ne→Po: 否定的関係から肯定的関係へ変化。

注3. 「—」は該当対象者がいなかったことを示す。

第 2 節 きょうだいの心理的葛藤の様態 (研究 1-2)

1. 目的 同胞との関わりで生じるきょうだいの心理的葛藤とその変容を検討する。本研究の葛藤は, 対人関係やライフイベントで同時に対立する情緒や複雑な情緒が混在する, 個人間葛藤と個人内葛藤を示す。

2. 方法 (1) **対象者** 研究 1-1 と同様。(2) **手続き** 研究 1-1 と同様。(3)

分析方法 母親と同胞に関する語りを抽出し、「きょうだいと母親と関わる中でどのような葛藤を体験し、それをどのように自己に位置付けていったのか」という視点で類似した意味内容の語りをグルーピングし、葛藤のテーマをつけて下位カテゴリを構成した。上位カテゴリも同様の作業を繰り返し、きょうだいの心理的葛藤様態とした（一致率は83.8%）。上位カテゴリを発達段階に沿って並べ、心理的葛藤様態の変容モデルを作成した。上位カテゴリを【】、下位カテゴリを〈〉で示した。

3. 結果と考察 きょうだいは、幼児期と学童期で、同胞との間で〈怒り〉や〈人の目が気になる〉【否定的感情】を体験していた。それには〈他者に責められる〉といった【周囲の環境の否定的捉え】や、母親との間で生じる〈不満〉などの【否定的感情】の影響が推察された (Figure 1)。青年期では、きょうだいは葛藤を肯定的に捉え、〈同胞のため〉〈同胞の影響を意識〉して、【進路・職業選択の意思】に活かすことが示された。

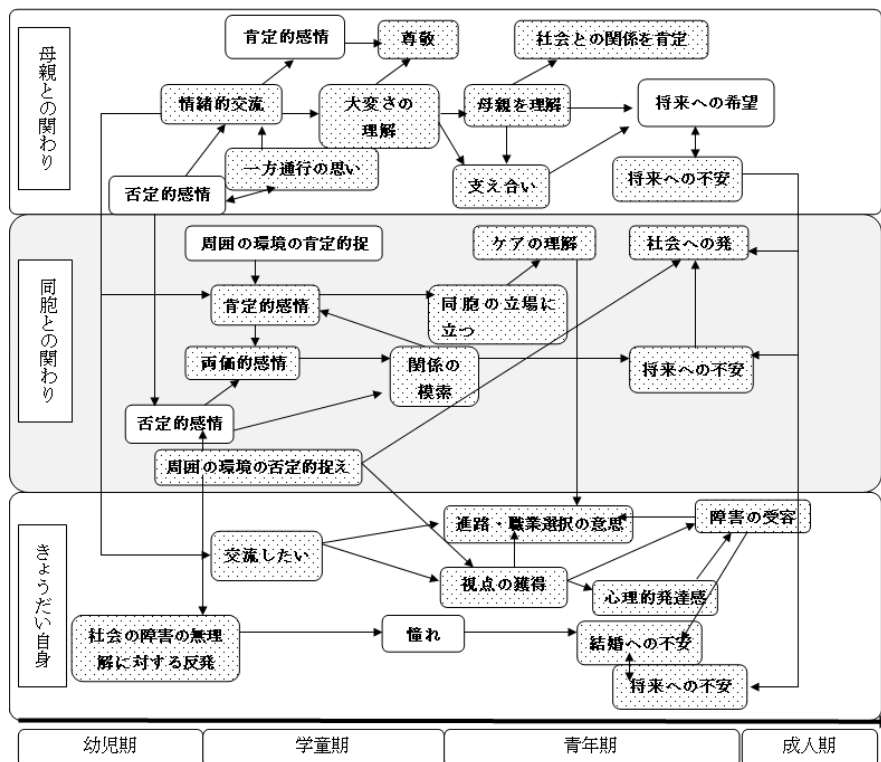


Figure 1. きょうだいの心理的葛藤様態とその変容モデル。
注) 横軸は発達段階を、網掛けは肯定的関係性のきょうだいの推移を示す。

第 3 節 母子関係と同胞関係のサブシステムからみたきょうだいの心理的葛藤の様態 (研究 1-3)

1. 目的 きょうだいの心理的葛藤様態とその変容が、サブシステムによって違いがあるのかを検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究 1-1 と同様。(2) 手続き 研究 1-1 と同様。(3) 分析方法 研究 1-1 の類型ごとに、Figure 1 の上位カテゴリもしくは下位カテゴリが出現しているかどうかを検討した。

3. 結果と考察 母子関係と同胞関係が肯定的関係の場合、葛藤体験から協力や援助、調和といった特性を受け入れていた。とくに、同胞や家族を理解する視点を獲得して活かそうとする【視点の獲得】や【進路・職業選択の意思】で、葛藤を乗り越えたときに得られる成長や、生き方の方向性を決定するようなポジティブな影響性があることが推察された。

第 3 章 母子関係と同胞関係の関係性からみたきょうだいの心理的葛藤 : TAT による無意識的側面の検討 (研究 2)

第 1 節 健常大学生と比較したきょうだいの無意識的な心理的葛藤の特徴 (研究 2-1)

1. 目的 主題統覚検査 (Thematic Apperception Test; TAT) は、過去・現在・将来に至る物語から、被検査者のパーソナリティ特徴を掴み、他者との関係性とそこで生じる葛藤を汲み取ることが可能な心理検査である。本研究では TAT を実施し、きょうだいの TAT 物語から、無意識的な心理的葛藤が非きょうだい群とどのように性質が異なるのかを検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究 1 と同様 (Handicapped Siblings, 以下, HS 群)。統制群は、健常な兄弟姉妹をもつ大学生 19 名 (Non Handicapped Siblings: 以下, NHS 群)。平均年齢 19.9 歳。(2) 手続き TAT 図版はマレー図版 7

枚(1, 2, 3BM, 6BM, 7GF, 13B,14) を用いた。(3) 分析方法 各図版の反応分類枠 (鈴木, 1997) に基づき, 両群の反応の着眼点別に出現率を χ^2 検定および Fisher の直接確率法で比較した (一致率は 92.3%)。

3. 結果と考察 HS 群は NHS 群よりも図版の人物の無意識的状态を捉える傾向が示された (たとえば図版 13B, $\chi^2(1) = 9.75, p < .01$)。無意識的状态が悩みや悲しみ等, 否定的なものほど共感することが推察された。

第 2 節 無意識的母子関係と無意識的同胞関係のサブシステムの類型化 (研究 2-2)

1. 目的 きょうだいと母親の関係 (以下, 無意識的母子関係) ときょうだいと同胞の関係 (以下, 無意識的同胞関係) を検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究 1 と同様。(2) 手続き 研究 2-1 と同様。(3) 分析方法 対象者ごとに物語の系列的な流れから無意識的母子関係と無意識的同胞関係を分析し, 全対象者を総合して類型化を行った (一致率は, 無意識的母子関係 83.3%, 無意識的同胞関係 77.8%)。

3. 結果と考察 両関係は, 「受容的關係」, 「表面的關係」, 「葛藤的關係」, 「非受容的關係」に分類された。Table 1 の「好転型」を〈Po〉, 「表面的關係」は〈Po〉, 「葛藤的關係」は〈Ne〉とみなして意識的側面と無意識的側面の關係性を比較した。結果, 意識的側面の關係性と無意識的側面の關係性が一致していたきょうだいと, 一致していないきょうだい ($n=7$) が示された。TAT 図版には, 「内在化された人間關係世界」 (齋藤, 1973) が投映されることから, 後者のきょうだいが捉える無意識的關係性は, 實際の關係性とは異なることが推察された。

第 3 節 きょうだいの無意識的な心理的葛藤の様態 (研究 2-3)

1. 目的 個人の内部にある欲求と外部環境から作用する圧力の力動的相互作用の視点から, きょうだいの無意識的葛藤を検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究1と同様。(2) 手続き 研究2-1と同様。(3) 分析方法 ①時間的広がり, ②葛藤状態 (欲求・圧力の関係), ③葛藤の解決方法に着目し, 反応カテゴリに沿った分析 (鈴木, 1997), 情報分析枠 (藤田, 2001), 力動的分析 (西河, 2008) を参考に分析した (一致率 83.3%)。

3. 結果 ①時間的広がり: 過去や将来が欠落し, 時間的広がりが乏しいきょうだいがみられた ($n=7$)。②葛藤状態 (欲求・圧力の関係): 葛藤状態は家族関係の葛藤, 対人関係の葛藤, アイデンティティの葛藤に, 欲求は外的事象への欲求, 対人欲求, 圧力排除の欲求に, 圧力は人的圧力, 環境圧力, 無意識的圧力に集約された。③葛藤の解決型: 自己解決型, 他者依存型, 未解決型, 葛藤回避型に分類された。

第4節 無意識的な母子関係と同胞関係のサブシステムからみたきょうだいの無意識的な心理的葛藤の様態 (研究2-4)

1. 目的 無意識的母子関係と無意識的同胞関係別に, 葛藤の解決型および欲求・圧力の特徴について検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究1と同様。(2) 手続き 研究1, 2と同様。(3) 分析方法 研究2-2, 2-3を元に, 関係性別に対象者を分類した。

3. 結果と考察 無意識的母子関係と同胞関係ともに「非受容的關係」の者は葛藤回避型に, そのどちらかが「非受容的關係」の者は, 葛藤回避型 (50%), 未解決型 (33.3%), 自己解決型 (16.7%) になった。母親や同胞に対して否定的もしくは攻撃的な感情が投射されやすい「非受容的關係」では葛藤を主体的に解決しがたいことが推察された。

第4章 母親からみたきょうだいと同胞との関係性および

きょうだいとの認識のズレに関する研究 (研究3)

第1節 母親からみた母親ときょうだい, 母親と同胞との関係のサブシ

ステムの類型化 (研究 3-1)

1. 目的 母親からみた母親ときょうだいとの関係性および母親と同胞との関係性を類型化する。次に、それらときょうだいからみた母子関係との違いについて検討する。

2. 方法 (1) 対象者 研究1の対象者のうち同意を得た母親13名。平均年齢54.2歳。(2) 手続き 研究1と同様。(3) 質問内容 同胞ときょうだいに関する気持ち等。(3) 分析方法 研究1-1と同様。母親からみた視点に変更してカードを切片化した(類型化の一致率は、母子関係79.8%、母親と同胞の関係85.2%)。

3. 結果と考察 母子関係は、「良好型」、「一方的関与型」、「好転型」、「表面的関係」に分類された。同胞関係は、「積極的関与型」と「良好型」に分類された。母親は同胞の介護を中心に担う存在であるため、母親から積極的に働きかけることで同胞との親密な関係を形成しやすいと考えられる。Table 1と比較した結果、約6割のきょうだい(n=8)が一致しており、サブシステムの捉え方は概ね類似しているといえる(Table 2)。

Table 2
母親からみた母子関係と同胞関係を合わせたサブシステムの類型化

		母子関係			
		良好型 (Po)	好転型 (Ne→Po)	表面的関係 (Nu)	一方的関与型 (Ne)
同胞関係	積極的関与型 (Po)	n=5 (B, G, H, Q, R)	n=3 (I, J, P)	n=1 (A)	—
	良好型 (Ne→Po)	n=2 (C, E)	n=1 (F)	—	n=1 (D)

注1. アルファベットは対象者を示す。

注2. Po: 肯定的関係, Ne: 否定的関係, Ne→Po: 否定的関係から肯定的関係へ変化, Nu: ニュートラルな関係

注3. 「—」は該当対象者がいなかったことを示す。

第2節 きょうだいの心理的葛藤に対する母親の認識に関する検討 (研究 3-2)

1. 目的 母親ときょうだい間における同胞に関する認識のズレを検討する。とくに、【障害受容】と【将来の不安】に着目した。

2. 方法 (1) 対象者 研究3-1と同様。(2) 手続き 研究1と同様。(2) 質

問内容 研究 3-1 と同様。(3) 分析方法 母親のきょうだいおよび同胞に関する語りを切片化してラベリングした (一致率 83.8%)。次に、研究 1-2 の結果から、母子ごとに相違がみられる点について比較した。

3. 結果と考察 【障害受容】では、きょうだいに〈障害の説明はしていない〉母親は、「だんだん分かって来るんじゃない？」(事例 A) と楽観視していたが、きょうだいに〈障害の重篤化を理解できない〉葛藤を抱えていた。【将来の不安】では、母親は〈将来は施設入所へ〉という方向性を決めているが、〈将来は (同胞) を助けてほしい〉期待もあり、きょうだいは【将来の不安】を漠然と感じていることが推察された。

第 5 章 総合考察

第 1 節 本研究の成果

本研究の目的は、重度障害者きょうだいの家族サブシステムと心理的葛藤について意識的側面と無意識的側面から検討し、母親ときょうだい間における家族サブシステムと心理的葛藤に生じているズレを明らかにすることであった。その結果、サブシステムは肯定的関係と否定的関係の要素によって分類でき、発達段階による変化がみられた (研究 1-1, 3-1)。また、サブシステムの無意識的側面と意識的側面が異なる場合、家族間葛藤の存在が推察された(研究 1-1, 2-2)。心理的葛藤は、意識的側面では同胞の現実場面に関するきょうだいの葛藤が発達段階ごとに変化し、肯定的関係性のきょうだいは葛藤体験を自身の人生に積極的に生かしていた (研究 1-2, 1-3)。無意識的葛藤には家族関係、対人関係、アイデンティティの葛藤があり、無意識的關係性で否定的な感情が強い場合、これらの葛藤が解決しにくいことが示された (研究 2-3, 2-4)。また、母親ときょうだいからみた母子サブシステムはほぼ同様のサブシステムが

形成されていたが、母親と同胞との関係に否定的要素は見られず、心理的分離の難しさが推察された。きょうだいと母親の間に生じるズレは、お互いの思いやりを指摘した松岡・井上 (2002) の知見を支持したといえる。きょうだいの母子サブシステムの在り方、葛藤の体験様式や葛藤解決型も影響していると推察された (研究 3-2)。

以上から、積極的に葛藤を受け入れていくための土台として良好なサブシステムの構築が重要であり、各サブシステムが機能的に働くことで、問題解決にあたって家族成員の機能や役割が明確となるといえる。なお、どの関係性でも、将来的処遇についての不安が生じていたことから、母親ときょうだいのズレを埋めていくことが求められるだろう。

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

本研究で得られた知見を一般化するため、きょうだいと家族の属性を可能な限り統制する必要がある。また、本研究では母親-きょうだい-同胞の家族サブシステムに着目したが、父親や他のきょうだいなどを含む家族システム全体を捉えた検討を行う。さらに、きょうだいや家族の発達の危機を支援するために、家族システムが凝集性と適応性をバランスよく機能できるよう、その有用性を臨床の場で実践していく必要がある。

引用文献

Ali, A., Hassiontis, A., Strydorn, A., & King, M. (2012). Self stigma in people with intellectual disabilities and courtesy stigma in family cares: A systematic review. *Research in Developmental Disabilities, 33*, 2122-2140.

Bellin, M. H., & Rice, K. M. (2009). Individual, family, and peer factors associated with the quality of sibling relationships in families of youths

with spina bifida. *Journal of Family Psychology*, 23, 39-47.

Davis, R. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, 116, 387-411.

藤田宗和 (2001). TAT の情報分析枠 (The Frame of Information Analysis) の提案——TAT プロトコル分析のための新しい枠組み—— 犯罪心理学研究, 39, 1-16.

平川忠敏 (1986). 障害児の同胞 幼年教育研究年報, 11, 65-72.

Hodapp, R. M., Glidden, L. M., & Kaiser, A. P. (2005). Siblings of persons with disabilities: Toward a research agenda. *Mental Retardation*, 43, 334-338.

河野 望 (2005). 障害児者の家族に関する研究 立命館人間科学研究, 8, 15-27.

小宮山博美・宮谷 恵・小出扶美子・入江晶子・鈴木恵理子・松本かよ (2008). 母親から見た在宅重症心身障害児のきょうだいに関する困りごととその対応 日本小児看護学会誌, 17, 45-52.

Kazak, A., & Marvin, R. (1984). Differences, difficulties and adaptation: Stress and social networks in families with a handicapped child. *Family Relations*, 33, 67-77.

松岡端幸・井上雅彦 (2002). 発達障害児のきょうだいの心理的成長過程における母親との意識のズレに関する研究 日本特殊教育学第 40 回発表論文集, 563.

McHale, S. M., & Gamble, W. C. (1989). Sibling relationships of children with disabled and nondisabled brothers and sisters. *Developmental Psychology*, 25, 421-429.

- 中村 剛 (2007). 障害児・者のきょうだいが同胞にいだく心理的特性に関する研究 山口大学心理臨床研究, 7, 11-21.
- 中村義行 (2011). 障害児の親・家族の心理と支援 中村義行・大石史博 (編) 障害臨床ハンドブック (pp.163-178) ナカニシヤ出版
- 西河正行 (2008). Thematic Apperception Test (主題統覚検査) の力動的理解について 大妻女子大学人間科学部紀要, 10, 95-124.
- 齋藤久美子 (1973). TAT. 倉石精一 (編) 臨床心理学実習——心理検査法と治療技法—— 誠信書房
- Simeonsson, R. J., & McHale, S. M. (1981). Research on handicapped children: Sibling relationships. *Child Care, Health & Development*, 7, 153-171.
- 鈴木睦夫 (1997). TAT の世界——物語分析の実際—— 誠信書房
- 橘 英彌・島田有規 (1990) 障害児のきょうだいに関する一考察——親の予測との関係の検討—— 和歌山大学教育学部紀要, 39, 37-49.